

メルヴィルのヤング・アメリカー  
『マーディ』における「明白な運命」のレトリック

齋木 郁乃

“I walk a world that is mine; and enter many nations, as Mungo Park rested in African cots....”

*Mardi*

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) が平水夫としての放浪生活を終え、コスモポリタンな作家としての自我を確立しようとしていた 1840 年代は、国家としてのアメリカが「明白な運命」(Manifest Destiny) をスローガンに、自由と民主主義の恩恵をより多くの人々に分け与えるという名目のもと暴力的ともいえる西への領土拡大を推し進めた時代でもあった。<sup>1</sup> アンドリュー・ジャクソン (Andrew Jackson) は 1837 年の退陣演説で、神がアメリカの民を「人類のために自由を守る自由の守護者」として選ばれたのだと述べた (Graebner “Introduction” xviii)。このような世界の救世主としてのアメリカのイメージを領土拡大の必然性と結び付けたのが「明白な運命」のレトリックである。「明白な運命」という表現を最初に用いたのは、『デモクラティック・レビュー』(Democratic Review) の編集者で拡張主義の論客でもあったジョン・オサリヴァン (John L. O’Sullivan) である。<sup>2</sup> オサリヴァンは 1845 年に「併合」(“Annexation”) と題したテキサス併合を擁護するための論考の中で、西への領土拡張は「年々増加する我が国の人口の自由な発展のために神が定めた、北アメリカ大陸を覆い尽くすという我々の明白な運命の成就」であると述べた (O’Sullivan 5)。これ以降、「明白な運命」のキャッチコピーは領土拡張という武力による征服を文明化し民主化するという啓蒙の使命にすり替えるのに絶大な効力を発揮し、テキサスに続いてオレゴン、カリフォルニアと 1840 年代後半の続けざまの領土獲得を鼓舞したのである。

メルヴィルが第 3 作『マーディ』(Mardi: and a Voyage Thither) を執筆してい

た 1847-48 年は、まさにこのような際限なき領土拡張の機運が最高潮に達していた時期だった。怒濤のような拡張主義の時代に合わせるようにメルヴィルもまた作家として事実に基づく旅行記から想像力を駆使した空想冒険小説へと新境地を開拓しようと意気込んでいた。1848 年 3 月 25 日に書かれたジョン・マレー (John Murray)宛ての手紙において、メルヴィルは『マーディ』を『オム一』の続編としての太平洋における私の冒険に関する実話」から「ポリネシア冒険のロマンス」へと変更する決意を述べ、次のように心情を吐露する。

I have long thought that Polynesia furnished a great deal of rich poetical material that has never been employed hitherto in works of fancy; and which to bring out suitably, required only that play of freedom & invention accorded only to the Romancer & poet. (Melville *Correspondence* 106)

メルヴィルがこのような「空想小説家と詩人にのみ授けられた自由と創造力の戯れ」を切望したのは、『タイピー』 (*Typee: A Peep at Polynesian Life*) と『オム一』 (*Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*) について、事実を書いているかどうかのみ取り沙汰され小説として正当に評価されなかったことへの苛立ちがあった。<sup>3</sup>

メルヴィルが「事実の物語」から解き放たれ「自由と創造」を駆使した結果、『マーディ』は「ジャンルのごった煮」と称された『白鯨』 (*Moby-Dick, or The Whale*) の前触れとも言えるような、旅行記風の前半から、同時代のアメリカやヨーロッパを風刺しつつ哲学や宗教について語る寓話を経て作家の創造の過程を自己言及的に語るメタフィクションに至る、特定のジャンルに収まらない物語形式となった。<sup>4</sup> エリザベス・フォスターが『マーディ』が旅行譚の章から宗教、哲学、科学、政治、詩人の芸術、信仰と知識、必然性と自由意志、時間と死と永遠についての断続的な討論へと深まっていくうちに、メルヴィルの読書と執筆が彼を知的な拡張と高揚へと駆り立て、彼の存在自体が過去の偉人たちの声とともに響き渡ることとなった」と述べているように、『マーディ』のまとまりのなさ、この時期のメルヴィルの膨大な読書体験と知的好奇心の高まりをそのまま反映している (Foster 661)。

メルヴィルに 1840 年代のアメリカの拡張主義の息吹を直接感じさせたのは、1839 年にニューヨークの出版業者エヴァート・ダイキンク (Evert Duyckinck)

がコーネリアス・マシューズ (Cornelius Matthews) と設立した「ヤング・アメリカ」という文学サークルである。<sup>5</sup> もともと政治運動として始まったヤング・アメリカの活動家が日常的に議論していたのは、「政治的ナショナリズム、文化的独立、若々しい自己主張、そして西部」であった (Rogin 71)。政治的なヤング・アメリカ運動の標榜する拡張主義と英国嫌いはあまりに過激で好戦的だったので、ダイキンクは徐々にヤング・アメリカ運動と距離を置くようになっていく (73-74)。『マーディ』はこのような政治的ヤング・アメリカ運動の台頭と文学的ヤング・アメリカ運動の揺らぎの中で生まれた。

本論は、『マーディ』において「明白な運命」という 1840 年代のアメリカを支配した政治的スローガンを利用してメルヴィルがいかにアメリカの暴力的な拡張主義を批判したかを探る試みである。具体的には、『マーディ』が「明白な運命」のレトリックを作者の想像力及び創造力が作品を支配することの比喩として濫用することにより、拡張主義の正当性を揺るがせていることを証明したい。

メルヴィルは拡張主義批判の舞台としてアメリカ本土ではなく太平洋上の架空の群島を選んだ。物語冒頭でこそピトケルン群島 (Pitcairn's island) からガラパゴス諸島 (the Gallipagos) へと具体的な地名をあげてアークトゥリオン号の行き先を示唆しているが、語り手のタジ (Taji) はマストヘッドの見張りに立ちながら船を捨てる覚悟を固めつつ次のように考える。

Where we then were was perhaps the most unfrequented and least known portion of these seas. Westward, however, lay numerous groups of islands, loosely laid down upon charts, and invested with all the charms of dream-land. (7)

人が訪れることもなくほとんど知られてもいない、地図にも曖昧にしか載っていないような島々は、「夢の国の魅力」で拡張主義者を誘惑すると共に、いかなる意味を付与することも可能だという点で、作者が思う通りに支配できる場所としても提供される。漠然とした西への方向性だけが示されるのは、どこを侵略するかは問題ではなく、西漸運動そのものを目的とするような拡張主義の空虚さを揶揄しているかのようだ。そもそもこの物語の副題「あちらへの航海」(A Voyage Thither) 自体が示す通り、タジの航海の目的地は「あちらの方」或いは何かの「向こう側」であるだけで、最後まで具体的にどこなのかは明らかにされない。タジは船を逃げ出してから自分のいる場所すら気にかけないのだ。

For much the same reason, it mattered little, whether on our passage we daily knew our longitude; for no known land lay between us and the place we desired to reach. So what could be plainer than this: that if westward we patiently held on our way, we must eventually achieve our destination? (18)

今いる場所と辿り着きたい場所の間には未知の土地しかなく、「辛抱強く西に進んでいきさえすれば目的地に着ける」という言葉の裏側には、そこに誰の物でもないと思える土地がありさえすればそれが目的地になるという拡張主義の暴力性への批判がこめられている。

メルヴィルはまた、海の論理で陸地の常識を覆そうともする。風を押しとどめられて西への移動を妨げられることは、陸地の人間を懷疑主義者にする、とタジは述べる。

[T]he geography, which from boyhood he had implicitly confided in, always assured him, that though expatiating all over the globe, the sea was at least margined by land. That over against America, for example, was Asia. But it is a calm, and he grows madly skeptical. (9)

ここに描かれているのは、風のもたらす「明白な運命」の宙づりである。海の向こうに必ず陸があると信じるように、アメリカの向こうに必ずアジアがあると考えるのが拡張主義の論理だとすれば、風はその常識を裏切るものの象徴である。「明白な運命」はアメリカの領土拡大に懷疑を差し挟まないためのレトリックであるが、風は西漸運動を一旦停止させ、その正当性を根本的に吟味する瞬間の必要性を暗示しているように思われる。

オホヌー (Ohonoo) という島を支配するウヒア王 (King Uhia) は、小島を領有することに飽き足らずマーディという群島全体を掌中に収めたいという愚かな野望を抱いている。オホヌーを支配する者は全世界を支配する運命であると信じて疑わないウヒアをババランジャ (Babalanja) は非難する。

[H]olding himself foreordained to the dominion of the entire Archipelago, he upbraids the gods for laggards, and curses himself as deprived of his rights; nay, as having had wrested from him, what he never possessed. Discontent dwarfs his horizon till he spans it with his hand. 'Most miserable of demi-gods,' he cries, 'here am I cooped up in this insignificant islet, only one hundred leagues by fifty,

when scores of broad empires own me not for their lord.' (276)

ここでウヒアによって体现されているのは矮小化された帝国主義である。群島全体を支配することが神により「運命づけられた」おのれの「権利」であるというウヒアの根拠のないばかげた主張は、アメリカの「明白な運命」にも根拠がないこと、そして領土拡大の原動力となっているのは世界を領有したいという人間の愚かな欲望にすぎないことを暴露している。

『マーディ』における最大の拡張主義批判は、「明白な運命」のレトリックを用いて作家の爆発的な想像力が世界を飲み込んでしまう過程を描いたことである。ワイチー・ディモックは、『自由のための帝国』(*Empire for Liberty*)において、南北戦争前のアメリカの帝国主義的イデオロギーとメルヴィルの作家として作品を支配する力の間の相関関係を論じる中で、メルヴィルは『マーディ』において「事実」に執着するのをやめ「創造」に徹することで「最高位の著者の権利」を手にすることに成功したと述べている。メルヴィルの「自由と所有への傾倒」は単なる「信条」を超えて「詩学」として作用し、「テキスト主権の原則」は「所有者の主権の原則」と同等となるというのだ (Dimock 45-46)。作品を文字通り支配する語り手 (imperial narrator) は著者メルヴィルの支配する自我 (imperial self) と二重焼きとなり、他の登場人物を思うがままに名付け、操り、必要なくなると多くを不意に死なせてしまう。『マーディ』の語り手／作者は物語の中で君主 (monarch) として振る舞うのだ。

物語中最も作者に支配された章は「夢」 (Dreams) と題された 119 章であろう。この章が奇妙なのは、作中人物の行動の時間と、「語り手の語りの時間」と「作者のエクリチュール」の時間」が一体化していることである (千石 121)。118 章の終わりで「天蓋の下、皆でうとうとと眠りに落ち数えきれない夢を見た」と語られているため、筋書き上はこの夢は語り手タジの夢か、他の登場人物 (メディア、ユーミー、ババランジャ) の夢であるはずだ。しかしその夢の中身は明らかに作家メルヴィルの迸る想像力と創造力の発露そのものを表現しており、その原動力は随所にちりばめられた帝国主義のメタファーなのである。

まず、その夢はあたかもゴールド・ラッシュやフォーティ・ナイナズを予言するようなカリフォルニアの大草原の描写から始まる。

Dreams! dreams! golden dreams: endless, and golden, as the flowery prairies,

that stretch away from the Rio Sacramento, in whose waters Danae's shower was woven;—prairies like rounded eternities: jonquil leaves beaten out; and my dreams herd like buffaloes, browsing on to the horizon, and browsing on round the world; and among them, I dash with my lance, to spear one, ere they all flee.

(366)

黄金の夢は、黄金の大草原そしてゼウスの黄金の雨の降り注ぐサクラメント川に喩えられ、夢見る主体の想像力の豊穡さを誇示している。作者とおぼしき「私」は、バッファローの群れに喩えられた夢を狩ろうと槍を持って突進するネイティブ・アメリカンの狩人のような姿で立ち現れる。アメリカが西漸運動の一つの到着点であるカリフォルニアを支配下に置いたのは1848年、『マーディ』執筆中のメルヴィルは1846年に始まったメキシコとの戦争の行方を見据えていたはずだ。“Rio Sacramento”と川の名をスペイン語で呼び、軍事力に任せてメキシコから土地を奪うアメリカ人ではなく槍一本でバッファローと対峙する原住民のイメージに自らを重ね合わせることで、メルヴィルは夢の中とはいえ歴史的现实が振るう暴力を批判し帝国主義的な風景を書き換えようとしているのを見てとれる。

「私」の夢は、アジアから南米、西欧から東欧、そして南極やシベリアに至るまで駆け巡り、一瞬にして地球全体を支配下におさめたような錯覚に陥る。

Dreams! dreams! passing and repassing, like Oriental empires in history....

And far in the background, hazy and blue, their steeples let down from the sky, loom Andes on Andes, rooted on Alps; and all round me, long rushing oceans, roll Amazons and Oronocos....

But far to the South, past my Sicily suns and my vineyards, stretches the Antarctic barrier of ice: a China wall, built up from the sea, and nodding its frosted towers in the dun, clouded sky. Do Tartary and Siberia lie beyond? (366)

アンデス山脈、アマゾン川、オリノコ川という南米への言及は偶然ではない。モンロー大統領 (James Monroe) が1823年にモンロー主義を掲げ、西半球をアメリカの支配下におくことを宣言して以来、「明白な運命」もまたカリフォルニアの岸边にとどまることなく、メキシコを経由して南米へとその欲望の対象を拡大して行ったのである。また、太平洋を越えて東洋の帝国、万里の長城とい

ったアジアもまたアメリカの新しいフロンティアとみなされることになる。

実際、メルヴィルが『マーディ』を執筆中の1848年の段階で既にジェイムズ・ポーク大統領 (James Knox Polk) はスペイン政府の政治力の衰退に目を付け、キューバをアメリカに売るよう働きかけていた。次の一節は1850年に『ドボウズ・レビュー』 (*DeBow's Review*) に発表されたキューバ征服によるアメリカの利益を説く記事からの引用で、前記のメルヴィルの夢の描写と一見著しく類似している。

*We have a destiny to perform, "a manifest destiny" over Mexico, over South America, over the West Indies and Canada.... The gates of the Chinese empire must be thrown down by the men from the Sacramento and the Oregon, and the haughty Japanese trampers upon the cross be enlightened in the doctrines of republicanism and ballot box. The eagle of the republic shall poise itself over the field of Waterloo, after tracing its flight among the gorges of the Himalaya or the Ural mountains, and a successor of Washington ascend the chair of universal empire! These are the giddy dreams of the day. ("The Late Cuban Expedition" 249)*

「明白な運命」を当然のごとくメキシコから南米全域へ、また中国、日本といった極東地域にまで拡大して適用し、「ワシントンの後継者が世界帝国の支配者の座に上り詰める」のを夢想する、アメリカの拡張主義者のあくなき欲望がここには明確に表れている。

メルヴィルはこのような「明白な運命」のレトリックを意識的に利用したのだろう。しかしながらその目的は帝国主義的な国家の欲望を体現することではなく、あくまでもメルヴィル自身の作家としての創造への情熱を表現することだったと言える。メルヴィルの見る夢は同時代の拡張主義者が見る「目のくらむような夢」ではなく、芸術家が見る想像力の発露としての夢である。作家は世界を征服するのではなく、世界に同化する。

*But beneath me, at the Equator, the earth pulses and beats like a warrior's heart; till I know not, whether it be not myself. And my soul sinks down to the depths, and soars to the skies; and comet-like reels on through such boundless expanses, that methinks all the worlds are my kin, and I invoke them to stay in their*

course....

Then again, I am dashed in the spray of these sounds: an eagle at the world's end, tossed skyward, on the horns of the tempest. (367)

地球の鼓動は「私」の鼓動と一体となり、世界は「私の血縁」になる。また、アメリカの帝国主義の象徴であるはずの「共和国の鷲」も、「私」の夢の中では地の果てで嵐にもまれて孤高に空高く舞い上がる「私」の比喻でしかない。

「夢」の章は後半にかけてますますメルヴィルの創作への自己言及的な言説に傾いていく。ケヴィン・ヘイズが『『マーディ』は1847年の半ばから1848年を通してのメルヴィルの読書の記録として読める』と言っているように (Hayes 41)、世界を物理的に駆け巡った後の「私」は古今東西の文学者、詩人、哲学者を自身の精神に取り込んで、形而上学的にも世界を支配する作家の像を呈示する。

Like a grand, ground swell, Homer's old organ rolls its vast volumes under the light frothy wave-crests of Anacreon and Hafiz; and high over my ocean, sweet Shakespeare soars, like all the larks of the spring. Throned on my seaside, like Canute, bearded Ossian smites his hoar harp, wreathed with wild-flowers, in which warble my Wallers; blind Milton sings bass to my Petrarchs and Priors, and laureate crown me with bays.

In me, many worthies recline, and converse. I list to St. Paul who argues the doubts of Montaigne; Julian the Apostate cross-questions Augustine; and Thomas-a-Kempis unrolls his old black letters for all to decipher. Zeno murmurs maxims beneath the hoarse shout of Democritus; and though Democritus laugh loud and long, and the sneer of Pyrrho be seen; yet, divine Plato, and Proclus, and Verulam are of my counsel; and Zoroaster whispered me before I was born. I walk a world that is mine; and enter many nations, as Mungo Park rested in African cots; I am served like Bajazet: Bacchus my butler, Virgil my minstrel, Philip Sidney my page. My memory is a life beyond birth; my memory, my library of the Vatican, its alcoves all endless perspectives, eve-tinted by cross-lights from Middle-Age oriels. (367)

1848年の初め頃から、メルヴィルはバーナード (Charles H. Barnard) やブーグ

ンビル (L. A. Bougainville) による旅行記を読み続ける傍らで、その読書の範囲をシェイクスピア、モンテーニュ、セネカ、ブラウン、オシアン、コールリッジ、ラブレールといった西洋古典に広げ情熱的に知識を吸収していった (Davis 62-67)。詩人の奏でる音楽に身をゆだね、哲学者と対話する「私」の姿は『マーディ』執筆を前にしたメルヴィル自身の読書遍歴を誇示し書物への耽溺を自賛しているかのようだ。「私の記憶」は「ヴァチカン宮殿の私の図書館」に等しいと豪語する作者は唐突にこの章の前半で多用した帝国主義的な比喩を挟み込む。「私は私のものである世界を歩く、多くの国家に立ち入る、マンゴ・パークがアフリカの小屋で休んだように…。」ここにきて初めて読者は、メルヴィルが『マーディ』において批判してきたはずの「明白な運命」のレトリックを「夢」の章で無邪気に濫用した理由を知る。メルヴィルの拡張主義は政治的な侵略や暴力ではなく、書物を通じて世界を知り尽そうとする間テクスト的な侵略であり知的な暴力なのだ。

こうして「夢」の章では物理的にも形而上学的にも世界を支配するコスモポリタンな作家の姿が浮かび上がる。ここで描かれる作家像はほぼ完全にメルヴィル自身と一致すると考えてよいだろう。クリストファー・ステンは次のように述べる。「メルヴィルがその時代のアメリカでもっともコスモポリタンな作家になったのはおそらく必然であった。最も広範に世界中を旅し、最も幅広い文化的経験を持ち、南太平洋、ラテン・アメリカ、アフリカそして北米において彼の時代を規定した植民地主義と文化的帝国主義について最も慎重に考察していたからだ」(Sten 38)。振り返れば『マーディ』の3章において既にメルヴィルはタジの相棒であり分身とも言えるヤール (Jarl) を自分自身のような「コスモポリタンな平水夫」の典型として登場させていた。

Now, in old Jarl's lingo there was never an idiom. Your aboriginal tar is too much of a cosmopolitan for that. Long companionship with seamen of all tribes: Manilla-men, Anglo-Saxons, Cholos, Lascars, and Danes, wear away in good time all mother-tongue stammering. You sink your clan; down goes your nation; you speak a world's language, jovially jabbering in the Lingua-Franca of the forecastle.

(13)

船の上でマニラ人、アングロサクソン人、混血のインディオ、インド人、デー

人などあらゆる部族と長く共同生活を送るうちに、部族や国の違いを超えて「世界語」で話せるようになったヤールのように、メルヴィルもまたリングフランカで語る世界主義的な作家を自負していたといえよう。

旅と読書によりコスモポリタンな作家が誕生する様を「明白な運命」のレトリックを自意識的に濫用して描写することに成功したメルヴィルは、最後に「明白な運命」の旗印のもとに土地や命を奪われたネイティヴ・アメリカンに言及することでアメリカの帝国主義の暴力性そのものを露見させることを忘れない。

And as the great Mississippi musters his watery nations: Ohio, with all his leagued streams; Missouri, bringing down in torrents the clans from the highlands; Arkansas, his Tartar rivers from the plain;—so, with all the past and present pouring in me, I roll down my billow from afar. (368)

オハイオ川を下り、ミシシッピ川に接続し、そこからやや遡ったミズーリ川から西へ向かうという水上のルートは、西部開拓農民の多くが通った道筋であり、西漸運動の舞台を意味する。またミズーリ川が「高地出身の部族を奔流の中で滅ぼす」と述べていることから、「山に住む人々」を部族名の語源の一つとするチェロキー族に言及していると考えられ、特に1838年にジョージア州からオクラホマ州まで、ミシシッピ川を越え、アーカンソー州リトルロックやミズーリ州スプリングフィールドなどを経由してチェロキー族が強制的に移住させられた際に通った道「涙のふみわけ道」(The Trail of Tears)を想起させる。<sup>6</sup>「過去と現在が私の中に流れ込み、私は遠くから私の大波を押し流す」と述べるメルヴィルは、アメリカの拡張主義の犠牲となったネイティヴ・アメリカンの歴史を引き受けて書くことをここで誓っているように思われる。その宣言通りに、145章においてメルヴィルはアメリカを揶揄した島、ヴィヴェンツァ (Vivenza) では、先住民が毎年僻地に追いやられ絶滅寸前であるとはっきり告発している。

Not yet wholly extinct in Vivenza, were its aboriginal people, a race of wild Nimrods and hunters, who year by year were driven further and further into remoteness, till as one of their sad warriors said, after continual removes along the log, his race was on the point of being remorselessly pushed off the end. (468)

アメリカの拡張主義者たちが領土拡大は神の意志であるとしたように、メルヴィルもまた自らのペンが紡ぎだすアメリカ批判を含む全ての言葉が、神か悪

魔か己の狂気か判然としない、他者の手に動かされて書いたものとうそぶいてこの章を終わらせる。

My cheek blanches white while I write; I start at the scratch of my pen; my own mad brood of eagles devours me; fain would I unsay this audacity; but an iron-mailed hand clenches mine in a vice, and prints down every letter in my spite. Fain would I hurl off this Dionysius that rides me; my thoughts crush me down till I groan; in far fields I hear the song of the reaper, while I slave and faint in this cell. The fever runs through me like lava; my hot brain burns like a coal; and like many a monarch, I am less to be envied, than the veriest hind in the land. (368)

ここに描かれた「鉄の鎧を着た手が私の手を万力でしっかりと掴んで、私の意志とは無関係に全ての文字を書かせる」状況は、『白鯨』132章において「エイハブはエイハブなのか。この腕を上げるのは神なのか、それとも誰なのか。」と問うエイハブに似ており、王であると同時に奴隷でもあるというエイハブの抱える矛盾がメルヴィルの考える創造の苦悩に由来することを暗に示している(Moby-Dick 545)。

今福龍太は『群島—世界論』において、植民地主義を触媒として産まれた近代国家の成り立ちを「観念としての大陸」と「具体物としての群島」間の不均衡として説明している。『マーディ』は群島という具体物に無数の「比喩や象徴や記号や寓意」を付与することにより、大陸が「観念を生産する機構」に過ぎないことを暴露しているのではないか(367-68)。『マーディ』は「群島の側から大陸の歴史的欲望を明るみに出し、世界像を書き換えてゆく作業」(今福 368)であり、メルヴィルをそのような野心的な試みに駆り立てたのは、1840年代の「政治的ヤング・アメリカ」が標榜する領土拡張へのむき出しの欲望とそれを正当化する道具としての「明白な運命」のレトリックを、世界中を旅し世界中の書物を征服したいという作家の想像と創造への飽くなき欲求に書きかえる、メルヴィルなりの「文学的ヤング・アメリカ」の精神だったといえよう。

#### 注

1 19世紀のアメリカの西漸運動に関しては、グリーブナー(Norman A. Graebner)の“Introduction”を参照。

2 「明白な運命」の初出を突き止めたのはジュリアス・プラット (Julius W. Pratt) 。プラットは、オサリヴァンの論考はテキサス併合という既に解決済みの問題を扱っていたためにさしたる注目を浴びず、むしろ以下のようにオレゴン獲得の必要性を説いた 1845 年 12 月の『モーニング・ニュース』の社説の方が「明白な運命」を拡張主義者の標語にするきっかけとなったと述べている (Pratt 798) 。 “And that claim is by the right of our manifest destiny to overspread and to possess the whole of the continent which Providence has given us for the development of the great experiment of liberty and federated self-government entrusted to us...” (Pratt 796) .

3 『マーディ』の序文でも、メルヴィルは次のようにロマンスを書くに至る心境の変化を語っている。 “Not long ago, having published two narratives of voyages in the Pacific, which, in many quarters, were received with incredulity, the thought occurred to me, of indeed writing a romance of Polynesian adventure, and publishing it as such; to see whether, the fiction might not, possibly, be received for a verity: in some degree the reverse of my previous experience” (xvii) .

4 『マーディ』のまとまりのない物語形式について、ジョン・イヴレフは 19 世紀半ばのニューヨーク市で可能だった著述業の 3 つの形態を反映していると論じている。メルヴィルはまずワシントン・アーヴィング (Washington Irving) のような「お上品なニューヨーク人」として旅行記の部分を書き、続いて「野心的な改革運動の旗手」として寓話の部分を書き、最後に「専門的な職業作家」として芸術創造の過程を自己言及的に語ったのだ (Evelev 308) 。

5 マイケル・ローギンは、メルヴィルとヤング・アメリカ運動の関わりについて詳細に論じている (Rogin 70-76) 。メルヴィルが政治的なヤング・アメリカ運動に触れるきっかけとなったのは、長兄ガンズヴォート (Gansevoort Melville) であり、1846 年にガンズヴォートが亡くなると間もなく、ダイキンクがメルヴィルに文学的なヤング・アメリカ運動への参加を促した。ジョン・オサリヴァンも政治的なヤング・アメリカ運動の中心的メンバーの一人である。

6 チェロキー族と「涙のふみわけ道」については、藤永 150-209 頁を参照。

#### 引用文献

Davis, Merrell R. *Melville's "Mardi": A Chartless Voyage*. New Haven: Yale UP,

1952.

- Dimock, Wai-chee. *Empire for Liberty: Melville and the Poetics of Individualism*. Princeton: Princeton UP, 1991.
- Evelev, John. "‘Every One to His Trade’: *Mardi*, Literary Form, and Professional Ideology." *American Literature* 75.2 (2003): 305-33.
- Foster, Elizabeth S. "Historical Note." Melville 657-81.
- Graebner, Norman A. ed. *Manifest Destiny*. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1968.
- . "Introduction." Graebner xv-lxx.
- Hayes, Kevin J. *The Cambridge Introduction to Herman Melville*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- "The Late Cuban Expedition." Graebner 245-53.
- Melville, Herman. *Correspondence*. Evanston and Chicago: Northwestern UP and Newberry Library, 1993.
- . *Mardi: and a Voyage Thither*. Evanston and Chicago: Northwestern UP and Newberry Library, 1970.
- . *Moby-Dick, or The Whale*. Evanston and Chicago: Northwestern UP and Newberry Library, 1988.
- O’Sullivan, John L. "Annexation." *The United States Democratic Review* 17 (1945): 5-10
- Pratt, Julius W. "The Origin of ‘Manifest Destiny.’" *The American Historical Review* 32.4 (1927): 795-98.
- Rogin, Michael Paul. *Subversive Genealogy: The Politics and Art of Herman Melville*. Berkeley: U of California P, 1985.
- Sten, Christopher. "Melville’s Cosmopolitanism: A Map for Living in a (Post-) Colonialist World." *Melville “Among the Nations”: Proceedings of an International Conference, Volos, Greece, July 2-6, 1997*. Eds. Sanford E. Marovitz and A.C. Christodoulou. Kent: Kent State UP, 2001. 38-48.
- 今福龍太 『群島—世界論』 東京：岩波書店、2008年。
- 千石英世 「メルヴィルの『マーディ』」 *Oberon* 17.2 (1978): 114-31.
- 藤永茂 『アメリカ・インディアン悲史』 東京：朝日新聞社、1994年。